



多摩美術大学校友会奨学生2021

<アート部門>

オウ ギョウユウ	Wang Xiaoyong	3
津田 みなみ	Tsuda Minami	4
樺山 祐人	Kabayama Sachihito	5
正田 七恵	Masada Nanae	6
前川 美衣	Maekawa Mii	7
加藤 大河	Kato Taiga	8
柴田 真央	Shibata Mao	9
チン イテン	Chen Yitian	10
小野坂 葉子	Onozaka Yoko	11
花形 槇	Hanagata Shin	12
徐 秋成	Xu Qiucheng	13

<デザイン部門>

キョ キョウタン	Xu Qiaodan	14
沈 璐珈	Shen Lujia	15
野尻 勇氣	Nojiri Yuki	16
森井 裕史	Morii Yuji	17

多摩美術大学 校友会 奨学生 最終成果報告

[アート部門] オウ ギョウユウ / 津田 みなみ / 樺山 祐人 / 正田 七恵 / 前川 美衣 / 加藤 大河 / 柴田 真央 / チン イテン / 小野坂 葉子 / 花形 槇 / 徐 秋成 [Art] Wang Xiaoyong / Tsuda Minami / Kabayama Sachihito / Masada Nanae / Maekawa Mii / Kato Taiga / Shibata Mao / Chen Yitian / Onozaka Yoko / Hanagata Shin / Xu Qiucheng
[デザイン部門] キョ キョウタン / 沈 璐珈 / 野尻 勇氣 / 森井 裕史 [Design] Xu Qiaodan / Shen Lujia / Nojiri Yuki / Morii Yuji

多摩美術大学校友会奨学金について

多摩美術大学校友会奨学金とは、制作・研究活動に熱心な本学の学生を対象とした返済義務のない奨学金制度です。校友会奨学金選考委員会による書類審査の上、毎年15名の奨学生を決定し20万円を給付いたします。

各奨学生のご活躍を多くの方にご紹介するため、1年間の研究成果をまとめた冊子を作成いたしました。ご覧いただけますと幸いです。

■ 募集部門について

所属学科に関わらず、自分の研究(作品制作・論文・調査等)にあてはまると思う部門を応募時に選択していただきます。

アート部門

ファインアート系の作品制作、ファインアートに関する論文・調査研究等

デザイン部門

デザイン系の作品制作、デザインに関する論文・調査研究等

■ 2021年度選考委員 (敬称略)

アート部門

・八木 幾郎 ・菊地 武彦 ・古谷 博子 ・木村 剛士
・小林 光男 ・寺井 弘典 ・加納 豊美
・海老塚 耕一 (論文) ・深津 裕子 (論文)

デザイン部門

・小泉 雅子 ・武正 秀治 ・藤原 大 ・岸本 章
・清水 淳子 ・米山 貴久 ・山下 恒彦
・海老塚 耕一 (論文) ・吉橋 昭夫 (論文)

■ 2021年度スケジュール

① 2021年6月1日(火)～6月22日(火) | 応募受付



② 2021年7月中旬 | 採用者決定・通知



③ 2021年7月31日(土) | 証書授与式 / 8月10日(火) | 奨学金給付



④ 2021年11月1日(月) | 中間報告【書類提出】



⑤ 2022年1月13日(木) | 最終成果報告【書類提出】



⑥ 2022年3月13日(日) | 最終成果報告【冊子発行】

※ 2022年も同様のスケジュールを予定しておりますが、今後の社会情勢により変更になる場合があります。

多摩美術大学校友会

多摩美術大学校友会は、1995年11月、多摩美術大学創立60周年を機に会員相互の親睦をはかり、多摩美術大学と芸術文化の発展に寄与することを目的に設立された同窓会組織です。現在、アーティストやデザイナーをはじめ様々な分野で活動する約4.5万人の会員と、国内外26支部のネットワークを有し活動しています。

20万円 × 15名

奨学金

校友会奨学金では、20万円(※返還義務なし)を15名に給付します。



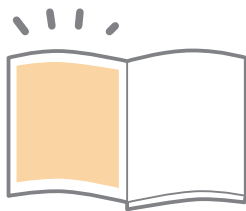
出前アート大学

社会で活躍する卒業生と共に、子どもたちへ向けてアート・デザイン・鑑賞の授業を行なっています。



ホームカミングデー

毎年6月に「定期総会」「ガーデン同窓会」等を開催しています。



芸術祭助成

毎年芸術祭にパンフレットへの広告掲載を通じて活動支援を行っています。



チャリティビエンナーレ

作品販売を目的とした展覧会を隔年開催。学部3年生以上～卒業生の作品を展示します。



四美大アラムナイ

四美大アラムナイ

女子美・造形大・武蔵美の各同窓会組織と連携した活動を行う取り組みです。



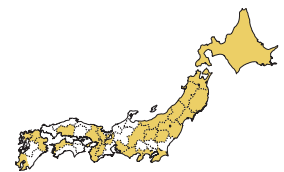
正会員カード

「正会員」に発行しているカードです。大学入構時の身分証明の他、美術館の観覧料の割引等の特典があります。



グループ活動助成金

発表活動を企画している卒業生の団体に助成金を給付しています。



支部活動

国内外26の支部が、各地で独自の活動を行っています。

多摩美術大学校友会事務局（八王子キャンパス共通教育棟1F）

【事務取扱時間】 平日9:00～11:30 / 13:00～17:00

※ 今後の社会情勢により変更になる場合があります。

Tel. 042-676-0802 Fax. 042-676-0827 E-mail. alt@tamabi.ac.jp



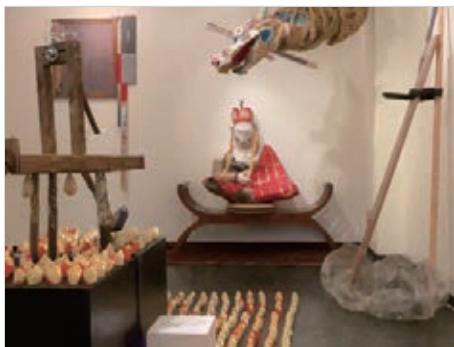
校友会HP

三メートル江山図

「散点透視法」という中国古典山水画の概念を脱構築し、
デサコタの風景を「抽象的散点透視法」で描く



オウ ギョウユウ Wang Xiaoyong (大学院 日本画 2年)



「三メートル江山図」 サイズ可変 ミクストメディア 2021年

インスタレーションと平面作品で構成された作品群で、「散点透視法」という中国古典山水画の概念を脱構築し、中国南地方のデサコタの風景を「抽象的散点透視法」で描く作品である。

デサコタは、社会学者テレンス・ゲイリー・マギーが取り上げた地理概念だ。都市の周辺地域で、戸籍制度によって都市と農村が二元的な状態になっている中国の地理的隙間を指す。この作品はデサコタの記号を単語として、物語を語る作品である。

建築物と肉体の関係

建築物に対して抱く違和感をキッカケに表現し考察を深めます。



津田 みなみ Tsuda Minami (大学院 油画 1年)



1



2



3

1 - 「中にいる #6」 100.0×80.3×3.0cm キャンバス、油彩、アクリル 2022年

2 - 「箱の中に#1, #2, #3」 27.3×19.0×2.0cm each キャンバス、油彩、アクリル 2022年

3 - 「津田みなみ個展 箱の中に居る」展覧会風景 会場: Gallery TOH 会期: 2022年1月7日-17日

建築物に対して抱く違和感をキッカケに表現し考察を深めます。その個人的感覚が何なのか。表現物を媒介として他者の意見からさらに思考を深め、更なる結論を求め表現を追求します。建築物を違和感の対象として、肉体とは全く別の無機物的存在として取り扱ってきましたが、表現を重ねることに

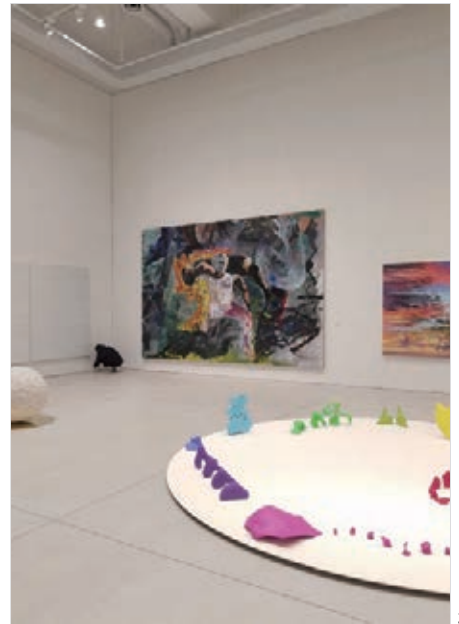
その存在の捉え方に変化が現れてきました。今後は無機物的に捉えていた存在が有機的に見える現象についてさらに考察し表現していく予定です。

衝撃的で崇高な巨大作品の制作

見ている者を強制的に引き込むような、衝撃的で巨大な作品を創りたいと思い制作した。根本的な考えは、絵画を絵画として見せず広大な自然を見ているような感覚に陥るような作品を目指した。



樺山 祐人 Kabayama Sachihito (大学院 油画 2年)



1 - 「リンピア(善玉)」 336×495cm キャンバス、油彩、クレヨン 2022年
2 - 展示風景

マスクをつけることによって人は普段と違う自分の中の性格や能力が出てしまう物だと思っている。マスクを常に付けるようになった現代、人が以前より内向的になったと感じる。これはマスクによって顔の大半が隠れてしまうことが原因だと思う。しかしマスクは押さえ込むだけではない解放もしてくれる。本来マスクとは仮面ライダーやウルトラマン、ヒーローのイメージがあった。私にとって最初に浮かんだマスクがプロレスの覆面マスクだった。

マスクマンの聖地メキシコのプロレスにはルチャリブレという儀式がある。これはもともと圧政者から自由を勝ち取る儀式でありお祭りだった。この絵は私にとってコロナに対するルチャリブレである。このようなコンセプトにより修了制作は3m×5mの巨大な平面作品を制作した。

物語の『余白』を描く

物語の出来事の、多様な解釈可能な「余白」を描く



正田 七恵 Masada Nanae (大学院 版画 1年)



1



2

1 - 「在処」 21.0×29.7cm 紙、シルクスクリーン 2021年

2 - 「不時着」 29.7×42.0cm 紙、シルクスクリーン 2021年

具体的な物語を形にするのではなく、描かれていない出来事の前後に興味があり、形にしています。絵に描かれた出来事の前後に必ずこれという正解はありません。しかし、鑑賞者の想像に任せながら事の前後を結びつけ、十人十色の解釈が生じてきます。

つまり、ある物語が確定的にあるのではなく、多様な解釈で満ちあふれた未確定な状態こそが、物語を表現するにあたって重要なものと考えています。この未確定な状態のことを私は「余白」と呼んでいます。

また、シルクスクリーンを含む版表現には、直接描画するものとは違い、自分で引いた線でありながら自分の線ではない感覚があります。つまり客観性です。物語の「余白」を表現するにあたって、主観をなるべく排除し、客観性を出すツールに版表現は向いていると考えています。それを実現するためにシルクスクリーンを用いた技法を研究しています。

漫画の文化と彫刻の融合性について

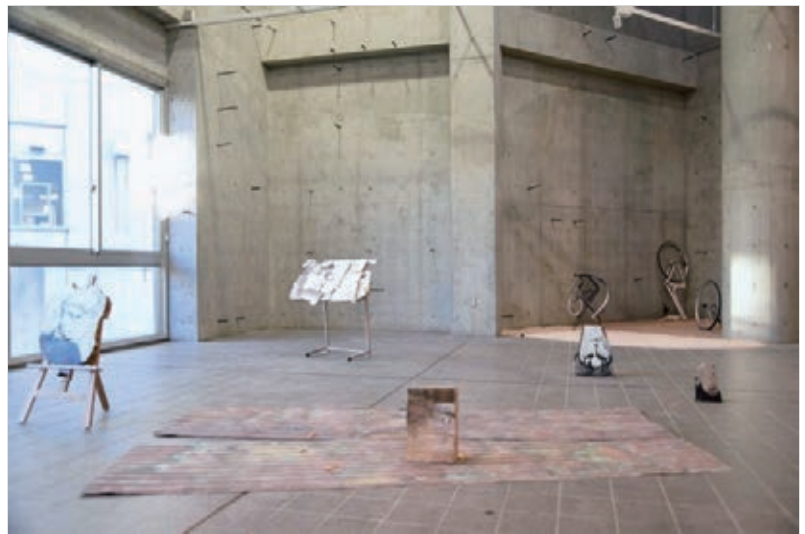
漫画の要素である「言葉」に関する制作とギャラリーでのグループ展



前川 美衣 Maekawa Mii (彫刻 3年)



1



2

1 - 「raw」 90x1500cm クラフト紙、パステル 2021年

2 - 「つっぱり展」 展覧会風景 会場:多摩美術大学 彫刻棟ギャラリー 会期:2021年11月24日-29日

私はこれまで継続的に、漫画と彫刻を組み合わせた作品を制作してきました。最近の制作では漫画を構成する大切な要素である「言葉」に焦点を当てた作品を作っています。今までやったことのないポエトリーラップのパフォーマンスや、文章のみで構成された作品、文字を変形させながら描くドローイングなど、あらゆる形で「言葉」を体現することによって「言葉」が自分にとってどのような役割を果たすのかを考察できたと思います。

また、11月には油画科の2年生を交えた3人展「つっぱり展」を彫刻棟ギャラリーで開催しました。油画の学生が立体作品を作り私が平面作品を作るという逆転した立場が、漫画と彫刻を合わせる私の作風とリンクする部分があり、違和感なくやり遂げる事ができました。

この経験を活かし、今後も制作を続けていきたいと思っています。

作品の空間に対する干渉、 及び宗教的オブジェクトとの関連

自身の作品における宗教的オブジェクトのエッセンスの再確認

加藤 大河 Kato Taiga (彫刻 4年)



1 - 「ZUSHI」 190×140×60cm 木材、ミニカー、釘、標本(タマムシ)、昆虫の死骸 2021年 撮影:若林勇人 (C)Hayato Wakabayashi
2 - 「針串刺しの刑 No.2,3」 120×180×5cm 木材、ミニカー、アクリルガッシュ 2021年

マレーヴィチの絵画においてアイコンが意識されている事に着目した。アイコンはロシアで生活空間の中に置かれ、旅先で携帯されることもある。制作テーマを考える際に、アイコンをこれまで見たものの中で置き換え、神棚や仏壇にたどり着いた。これらのオブジェクトの位置関係での共通性は、壁面の近くに、もしくは接して置かれることが挙げられる。

ミシェル・クノー著 / 高橋禎子訳『魂に触れるアイコンー絶対者に向けて開かれた窓』では、題名にもある通りアイコンを「霊性を持つ『窓』」に例えていた。自身の作品の多くが壁面に依存する事は、宗教的なオブジェクトのエッセンスから影響を受けているとはっきり確認することが出来た。卒業制作では仏壇が置かれる床の間をイメージして壁際かつ台座上に作品を配した。

新たなコミュニケーション環境による制作活動

フィジカルを通じたコミュニケーションと、
多様化するコミュニケーション



柴田 真央 Shibata Mao (彫刻 4年)



- 1 - 「Blue mob」 180×230×200cm モニター、webカメラ、ブルーシート発泡ポリスチレン 2021年 「TOKYO MIDTOWN AWARD 2021 優秀賞」 撮影:Keizo Kioku
2 - 「Blue hand」 サイズ可変インスタレーション ペニヤ板、ブルーシート発泡ポリスチレン 2021年 「北海道夏アーティストレジデンス(極寒芸術祭 2022 Teshikaga)」
3 - 「Blue mask」 200×600×600cm モニター、webカメラ、ブルーシート発泡ポリスチレン 2021年 「卒業制作」 撮影:Hayato Wakabayashi

制作の動機

私は人と人の繋がりやその中で生まれる「コミュニケーションの在り方」をテーマに作品を発表してきた。そのテーマを強く意識するようになったのはCovid-19の影響により、人流が制御され、今まで普通だと感じていた対面を前提としたコミュニケーションの在り方を再考せざるをえなくなったからだ。

制作活動

現在の主な手法として、クロマキー機能を使用し、画面上では見ることができないが確かに存在する彫刻表現を軸に、鑑賞者が作品の中に入ることのできるようなインスタレーション作品を制作している。それはここ数年で変

わってしまった、私たちのいる環境から得たものだった。そして人流が戻りつつある今の環境のなかで、新たな制作活動を行った。今回の研究では学校外での制作活動を中心に、より敏感に現在起きている環境に直接触れ合うことができた。

これからの活動

今までやってきたインスタレーションを表現の軸にしながら、多様化するコミュニケーションの在り方について考えていきたいと思う。それは言語や視覚にとどまらない幅広いコミュニケーションであり、作品を通して身体感覚や時間、空間を意識させるような広がりのある表現にも挑戦していきたい。

組み合わせによる構造の造形

緩やかな秩序での陶ユニットの組み合わせによる制作



チン イテン Chen Yitian (大学院 工芸 2年)



1 - 「第13枚目の枯れ葉」 「揺らぎ」 2021年

2 - 「第13枚目の枯れ葉」 36×38×25cm 陶 2021年

3 - 「揺らぎ」 37×34×23cm 陶 2021年



どれだけ複雑に見える構造でも、シンプルな部分部分の要素に分けられる。それを逆に言うなら、簡単な部分は複雑な構造になる。そのように、私の制作は、簡単なユニットを組み立てて、複雑な造形を作るということである。ところが、ユニットの組み立てには、人それぞれ自分なりの秩序の構築方法がある。

自分なりの秩序ということは、永遠に探求し続けられる問題である。さらに、秩序から抜け出して新しい単純な構造よりも、構造維持のために多くのエネ

ルギーを必要とする「散逸構造」を作ること必然だと考える。しかし、揺らぎの発生する瞬間が予測できない。その時点、その位置ではないと知り得ないものである。

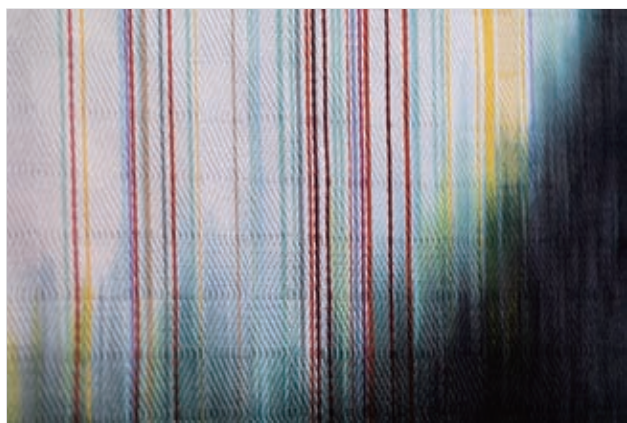
直感に頼んで、すでに組み合わせさせたユニットに反応し、時々秩序から逸脱して組んでいく。作っている間に、手で既定したユニットと、既定されたユニットに引かれる手が互いに制御しつつ、「する」と「される」の間にバランスを探していく。

テキスタイルでまたたく光景を作り出す

織表現ならではの新たな視覚体験の研究



小野坂 葉子 Onozaka Yoko (TD 4年)



1 - 「光景のまたたき」 200.0x355.0x1.5cm 麻、綿、ポリエステル 2022年
2 - 1の詳細

研究概要

私は「見る」ということに関心がある。今この瞬間見ているものは絶えず変化し、刻一刻と過去になっていく。あらゆるものの細胞や分子は絶え間なく動いているため、全く同じ場面は二度と無い。私はこれが不思議でならない。私たちは更新される光景の只中に生きているのだ。普段はほとんど意識しないこれらのことに気がついた時、今自分の目で見ていることがたった一つのかけがえのない体験だと感じられ、光景がまたたき始めるように思うのだ。「常に小さくまたたきながら変化する光景」をテキスタイルで可視化することで、このことへの気づきや驚きを鑑賞者と共有したいと考えた。

作品について

卒業制作として、「光景のまたたき」をテーマに9点の織作品を制作した。ドローイングと素材の実験を重ねながら表現方法を模索した末、「ほぐし拵」という伝統的な織技法と、織と昇華転写プリントを融合させたオリジナルテクニックを用いて制作した。絵柄が繊維素材と一体化した時、そこに新鮮さや意外性が生まれると思う。テキスタイルならではの素材の特性と、染織技法を融合させることによって生まれた多層的な表現で、新たな視覚体験を作り出すことを目指した。

still human

「人間」からの逃走と、肉体の生成変化



花形 慎 Hanagata Shin (大学院 情報 2年)



1



2



3

1 - 「第一回肉体逃走合宿」 2021年

2 - パフォーマンスイベント「Agoraphobia」(隅田公園, Token Art Center) 2021年

3 - ダンサーの齊藤コンとともに熊野古道で行ったstill human, 2021年

初めて"それ"をした時のことを、ありありと覚えている。

私は、足先にカメラを装着し、その映像をヘッドマウントディスプレイ越しにリアルタイムに見ている。つまり、私の目は足先に移される。このことは、私の身体全体を変性させる。「前」は足先の方へと変わり、それによって肉体の意味が変化していく。私はまるで生まれたばかりの生物のように、新しい身体の使い方を試行錯誤する。とにかく前進したい、目の前のものをよく見たいという衝動で思考が満たされ、言語的思考は失われていく。見慣れ

たはずの世界が、まるで初めて見たかのように新鮮に映る。触覚が私を世界に位置付けてくれることが嬉しい。確かに今、私は何か違うものになり変わりつつあるという感覚を味わっている…。

—

本研究では、視覚を肉体の任意の場所に移すという状況によって、全てが意味付けられたこの「人間」なる肉体から、逃走することを試みる。

死後の世界への想像、夢、記憶

人間が死に対する印象は生まれる前に子宮にいたころの記憶でしょうか



徐 秋成 Xu Qiucheng (メディア 3年)



1 - 「黄泉の旅」展示風景 2021年

2 - 「黄泉の旅」 5分 Unity、Blender、紙粘土 2021年

私がよくみた夢の一つは、色や形がなく、言葉で説明するのが難しく、感覚しか覚えてない。とても柔らかく、薄い明るい色に満たされ、心地よい温度で包まれ、羊水の中にいるような感じの夢である。

中国の古代のお墓の形は、母の胎内（子宮）を意識して作られているとも言われ、子宮から生まれ、子宮に還る、再生を祈るシンボルである。つまり、死後の世界への想像は、生まれる前に子宮にいたときの感覚であるかもしれない。

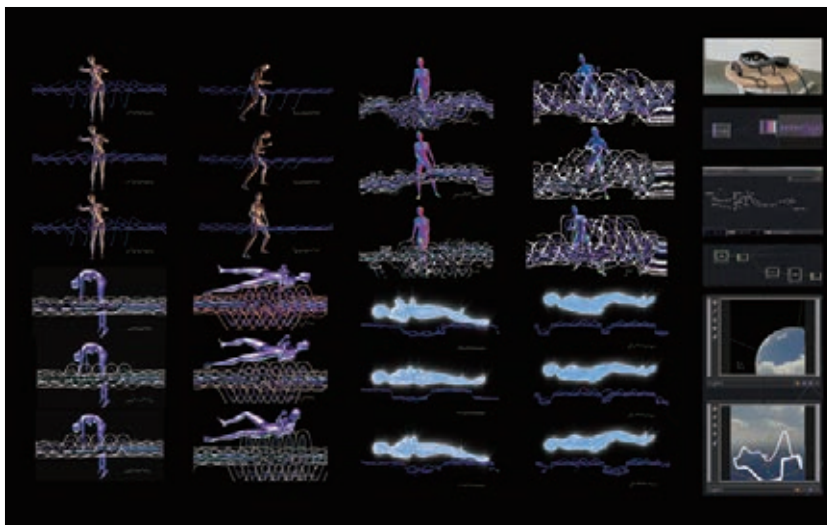
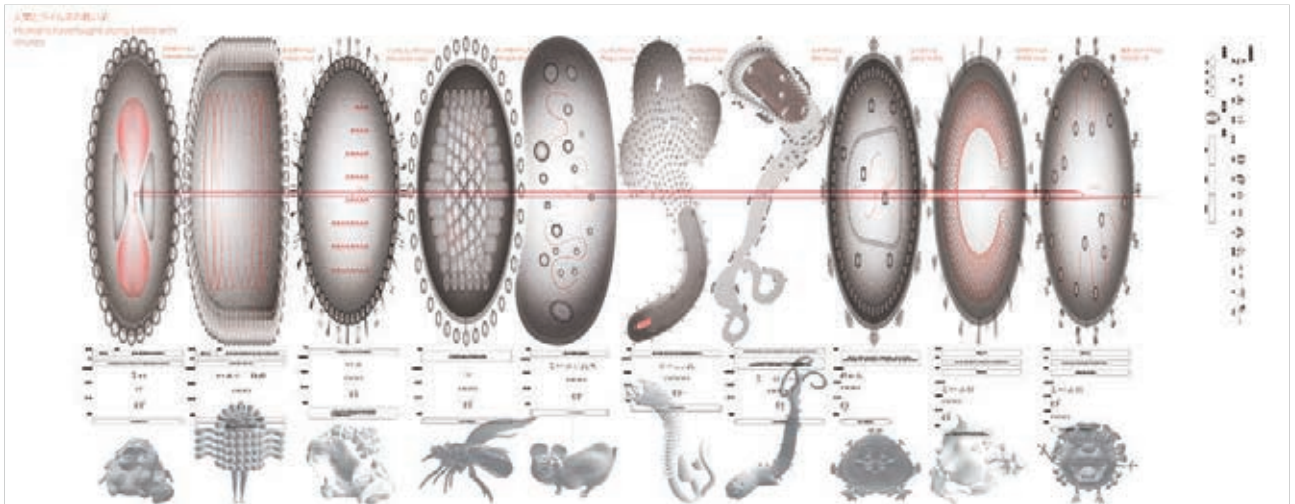
そして、死後の世界に対する解釈には、それぞれの地域の政治や宗教などの社会面も反映されており、政府や宗教が生きている人々に影響を与える手段の一種でもある。副葬品の立体彫刻とゲームエンジンで作った映像を組み合わせることで、死後の世界と生まれる前の世界を繋ぎ、個人の存在とその個人が置かれた環境との関係を研究したいと考えて本作品を制作した。

情報の視覚化の表現の研究 - 臓器の病変について -

現代の人々に直観的かつ受容されやすい視覚効果で臓器などの病変する過程を伝え、健康意識を高める



キョ キョウタン Xu Qiaodan (大学院 GD 2年)



1 - 「人間とウイルスの戦い史」 150x300cm Adobe Illustrator 2021年

2 - 「脳波の可視化デザイン映像」 1280x720px TouchDesigner 2021年

私たちの体の中にある臓器は毎日休むことなく機械のように働き続けている。臓器は私たちの見えない場所で、黙って仕事をしている。外部の刺激やウイルス、細菌の攻撃を受けることがあっても、臓器は過酷な環境にも耐えて動き続けている。現代はストレス社会だと言われている。日々の生活や仕事の重圧、ジャンクフードの頻繁な摂取は医療技術の発達と比例するように、私たちの体にかつてないほどの負荷をかけ続けている。

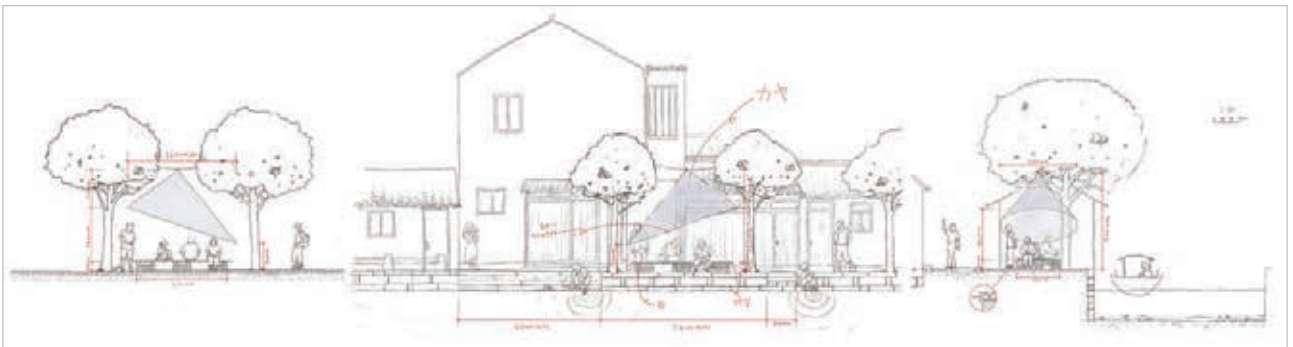
本研究の目的は、人々に直観的かつ受容されやすい視覚効果で病変する過程を伝え、健康意識を高めることである。人々に受け入れられやすく、かつ直観的に理解できる新しい視覚デザインによって、自身の体の中で何が起きているか理解を促し、健康に対する意識を高めていく必要がある。本研究ではダイアグラム、歴史年表、各種のグラフ、本、地図などインフォメーションデザインの表現手法を通じて、人々に病気に対する理解を促す。

河岸空間の価値という視点から見る沿川市街地

人の活動を注目し、水辺空間の活力を高める



沈 璐珈 Shen Lujia (大学院 環境 1年)



1 - 「空き地」 2021年
2 - 左から「正方形の茶室のコンセプト」「丸い茶室のコンセプト」「構想イメージ」 2021年
3 - 左から「断面図1」「断面図2」「断面図3」 2021年

きっかけ

河岸空間のデザインは、旧市街地の水辺の街の保存・再生において、直線的な河岸線や貫通した長さの通路が多く、水辺から人が孤立していることが弱点だと思われる。現在の河岸空間は、新しい店舗に隣接していることが多く、河岸空間は駐輪場となり、活力を失っていく。

そこで、人々が水辺に簡単にアクセスできるように、水辺環境の設計と改善を強化することを提案する。水辺の空間を利用して、人の活動を活性化させることで、空間の活力を高めるといものである。

空間の発想

この放置された空き地は長い河岸に沿って、奥行き感の強い直方体空間である。左には過去の米屋の敷地がある。周りに住んでいる人は多いけれども、ここにはあまり人が来ない。

だから、ちょっとした休憩のための簡易的な茶室としても利用できる。晴れた日には日陰になり、雨が降ればすぐに隣家で雨宿りできる。地域の人との交流や協力関係を促進することができると思われる。

集住による薪暮らしの可能性

薪暮らしの共同体について考える



野尻 勇氣 Nojiri Yuki (大学院 環境 2年)



1 - 「薪積み」の記録」 写真 2021年

2 - 「伊那谷の山裾に-山と住宅をつなぐ、小さな集落の薪暮らし-」 画用紙、水彩 2021年

1、集住による薪暮らしの可能性

集住による薪暮らしとは、戸建て住宅または集合住宅に住み、薪の調達や山の手入れ、薪割り、煙突掃除などを近隣世帯と協同して暮らす生活をいいます。集まって住むことにより、薪作業の負担が軽減され、住人同士のコミュニティが広がります。薪暮らし経験者が近くにいる状況であれば、薪暮らし未経験の家族や単身者にとっては心強い存在となり、薪暮らしの継続につながります。一世帯ではハードルの高い暮らし方ではあるが、複数世帯いることで実現しやすい暮らし方。荒廃する山との小さな循環をつくる、薪暮らしの共同体について考えました。

2、修士制作

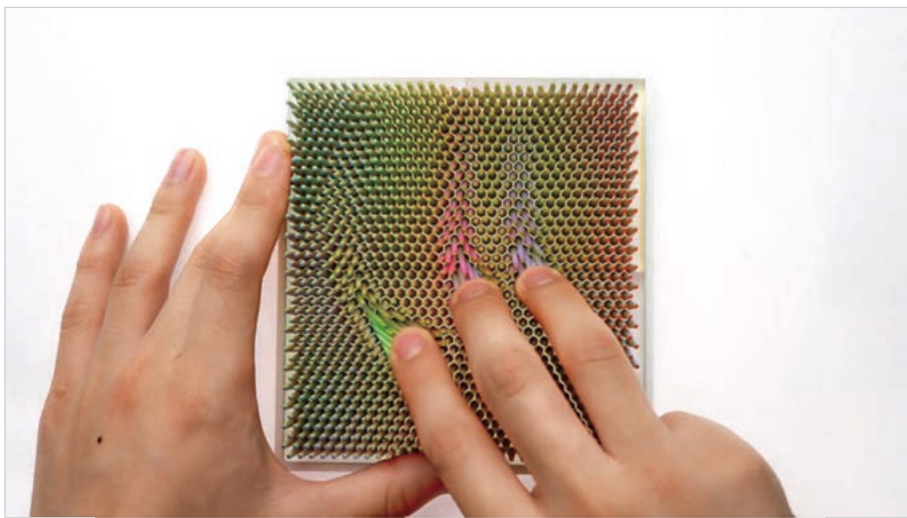
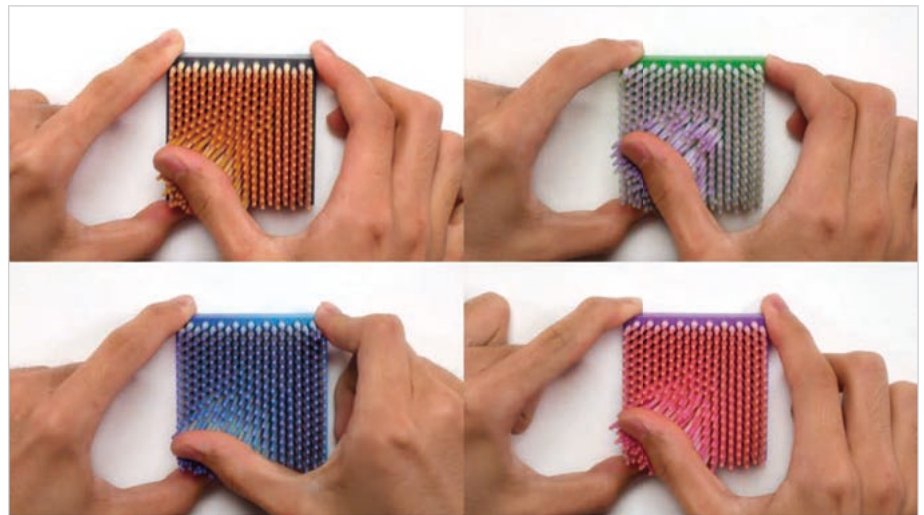
地に始まり、地に還る。全ては地続きの薪暮らし。2年間の研究踏査を踏まえ、長野県伊那市、南アルプスを眺められる木曾山脈の麓に、小さな集落の薪暮らしを提案しました。「薪を焚く」という行為は、人を暖め、山の循環を促します。薪暮らしを通して、山と人とのつながりを考えました。

『color pin texture』を用いた表現手法の確立

3Dプリント後に影響して表現性を付加できる色彩表現媒体の提示



森井 裕史 Morii Yuji (情報 3年)



1 - 「color pin texture」 8×8×3cm ゴムライク 2020年

2 - 「color pin texture : canvas」 16×16×3cm ゴムライク、アクリル 2021年

3Dプリンタによる表現とはモデリング段階の付加であり、プロダクトをペインティングするなど造形後に影響して表現する研究は行われていない。3Dプリンタ独自の造形手法を利用すればカスタマイズ以上の媒体として適切な設計ができると考える。

そこで私は昨年、色彩表現媒体「color pin texture」を開発した。絨毯アートという、毛並みの整った絨毯を指でなぞって毛を逆立せて描画する表現手法から着想を受け、弾性素材でできた異方向の面の色が違う棒オブジェクト

を配列している。これをなぞると、なぞった方向から死角となっていた色が露出し、指の軌跡を一時的に残すことができる。3Dプリントした物に塗料を用いずに自由に描画できる展望を見出すことができた。

しかし、上記研究は開発段階であり、これを用いた作品の制作が行えていない。そこで本研究では『color pin texture』を用いた表現手法確立を試みた。

多摩美術大学校友会奨学生最終成果報告2021

(発行)

多摩美術大学校友会事務局

〒192-0394 東京都八王子市鎌水2-1723

TEL:042-676-0802 FAX:042-676-0827 E-mail:alt@tamabi.ac.jp

(印刷)

株式会社グラフィック

(発行日)

2022年3月13日